青少年赤十字
モデル校報告書集（平成22年度版）

日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

人間を救うのは、人間だ。Together for humanity

青少年赤十字の目的は

児童・生徒が赤十字の精神に基づき、世界の平和と人類の福祉に貢献できるよう、日常生活の中での実践活動を通じて、いのちと健康を大切にし、地域社会、世界のために奉仕し、世界の人々との友好親善の精神を育成することです。

このため、３つの実践目標を提示しています。

１．健康・安全 ――― 生命と健康を大切にする。

２．奉仕 ――― 人間として社会のため、人のために尽くす責任を自覚し、実行する。

３．国際理解・親善 ――― 広く世界の青少年を知り、仲良く助け合う精神を養う。

青少年赤十字では、児童・生徒が自主的で、自律した生活態度を養うために、

「気づき」
「考　え」
「実行する」

という態度目標を掲げています。

はじめに

青少年赤十字モデル校の制度は、全国の青少年赤十字加盟校の中から、先進的または参考となる青少年赤十字活動を実施する学校を選考し、2年間モデル校として指定して、同校の更なる活動の活性化や地域への活動の理解促進を図るなど、青少年赤十字活動の振興を目的に平成17年度から始められました。

青少年赤十字は、命の大切さを理解し人間の尊厳を守る心、すなわち人の痛みが分かり、人を思いやることのできる心をもった青少年の育成を目的としています。そのために「健康・安全」、「奉仕」、「国際理解・親善」という実践目標を持ち、活動に当たっての態度目標として「気づき、考え、実行する」を掲げています。

これらは、命の教育、心の教育、生きる力の育成という点で学校教育が目指していることと共通しています。

青少年赤十字は、この目標を実現するため、そのよりどころとなる価値（赤十字の理念）やそれに付随するさまざまな教育的手法、研修や教育資材、人的な支援などまとまった体系を提供しています。これらは青少年赤十字に加盟するメリットとなるものですが、特にこれから青少年赤十字活動を導入しようと考えている学校や、加盟しているけれどもなかなか活動の一歩が始められないという学校、また今後新たな活動を模索している学校にとって、そのメリットが具体的にどう生かされているか、教科や学校・学級運営にどのように活用されているかを知る材料として、このモデル校報告書集を作成いたしました。

これらモデル校は、毎年全国から10校を指定しています。この報告書集に掲載されているモデル校は、平成20年度・21年度に指定されたもので、その活動の概要が紹介されています。

青少年赤十字を第一線で指導される先生方、さらにまた青少年赤十字活動を支援してくださっている教育機関の先生方をはじめ関係者の皆様にとって、本報告書集が青少年赤十字活動の理解と活動の充実に向けての一助となれば幸いです。

最後に、本書の編集にご尽力いただきましたモデル校選考会の先生方、活動事例のご報告をいただいた先生方に深く感謝申しあげます。

平成23年3月

日本赤十字社

目　次

はじめに …… 1

『青少年赤十字モデル校報告書集（平成 22 年度版）』の使い方 …… 3

小学校の部

埼玉県　川口市立戸塚南小学校 …… 6
大阪府　阪南市立東鳥取小学校 …… 9
長崎県　長崎市立戸石小学校 …… 12
香川県　高松市立檀紙小学校 …… 14

中学校・中等教育学校の部

北海道　遠軽町立安国中学校 …… 18
福井県　勝山市勝山北部中学校 …… 20
鹿児島県　霧島市立福山中学校 …… 22
神奈川県　横浜富士見丘学園中等教育学校 …… 24

高等学校の部

長野県　長野県豊科高等学校 …… 28
栃木県　県立学悠館高等学校 …… 30

日本赤十字社本社・各都道府県支部所在地一覧 …… 35

青少年赤十字モデル校選考会選考員（平成17年度～平成22年度） …… 36

『青少年赤十字モデル校報告書集（平成 22 年度版）』の使い方

報告書集に何を期待するのか

この報告集に取り上げられた活動からは、青少年赤十字のメンバーである児童・生徒たちをはじめ、指導者の先生方、さらには活動を支えてくださる地域の方々の考えと行動の息づかいが伝わってきます。これらの活動にヒントを得て、さらなる活動への意欲がかきたてられ、青少年赤十字の活動や活動の場が無限に広がっていることを感じることができれば幸いです。

赤十字の世界では、「人道の四つの敵」として、「利己心」「無関心」「認識不足」「想像力の欠如」を挙げています。私たちの実践活動が、それらにどのように取り組み、そしてメンバーである児童・生徒たちの成長に有効なものとなるかを本書に学びたいと思います。課題解決のヒントを発見したり、新たな発想での活動の創造の一助にしていただきたいと願っています。

○報告書集の構成

・活動の単位、期間、教育過程上の主な位置づけを表題の後に統一して表示しました。通年の活動か一回の活動かなどが一目でわかります。

・「ねらい」や「ポイント」の欄を設置することで、何をねらいどのように仕組むかを読み取ることができます。

・短い一言アドバイスとして、選考員のコメントを掲載しました。

○研究や情報交換の出発点として

・本報告書集は読み易さを配慮したため、紙面の都合でモデル校の意を十分尽くせないものが多いかもしれません。日本赤十字社を通じて、是非情報交換を行ってください。

・研究発表会やモデル校視察など相互訪問の資料に活用し、互いの情報交換をするのもマンネリ対策として有効です。

◎お待ちしています

・青少年赤十字モデル校に関するご意見、提案など何でも結構ですので、日本赤十字社の青少年・ボランティア課にお寄せください。

日本赤十字社　総務局　組織推進部　青少年・ボランティア課
住所　〒 105-8521　東京都港区芝大門 1-1-3
電話　03-3438-1311（代表）、03-3437-7082（ダイヤルイン）
HP http://www.jrc.or.jp

著名人の言葉

Phrases on the Red Cross Movement by the World celebrities

人間なら誰の心にも献身的な愛情が内在するものなのに、その心でものを感じ、考え、行動することが難しい人間たちに、熱心に呼びかけて思い出させてくれるのは、赤十字である。

赤十字は、この世界が将来は、今、私たちが住んでいる世界とは違ったものになれるという願いが持てる勇気を与えてくれる。私たちは、この暗闇に光をともしてくれた男「アンリー・デュナン」に深い感謝を捧げると共に、この光を燃やしつづけることをみんなの仕事にしなければならない。

アルバート・シュヴァイツァー（医師）

小学校の部

世のため、人のため、おじいちゃん、おばあちゃんのため!!

お年寄りとの温かな交流。空き缶リサイクルで車いすをプレゼントしよう

埼玉県　川口市立戸塚南小学校

活動の種類	活動の単位	活動期間	教育課程上の主な位置づけ
奉仕	全校・JRC委員会	通年	委員会活動・児童会

活動のねらい

平成18年度にはじめて、青少年赤十字活動に出会い、本校ではその趣旨である『気づき・考え・実行する』ことを生かした活動の計画や実践を進めているところである。今までの先進校で行われた様々な実践に加えて、本校の特色である「エコスクール」の取組を生かし、新しい柔軟な発想をもちながら、子どもたちの「生きる力」を育てていこうと実践を重ねている。JRC委員会を中心として、「世のため・人のため・学校のため」に働くことを委員会のテーマとして活動している。

そのような中で私たちは、主体的に「気づき・考え・実行する」児童を育成するために、お年寄りとの交流・空き缶回収を行って車いすをプレゼントすることを活動の中心として取り組んできた。核家族化が進み、人間関係が希薄になってきた近年において、このような活動を行っていくことは大変価値のあることだと考える。また、頭で考えるだけでなく、実感を伴う理解をすることで各教科や特別活動・道徳・総合的な学習の時間の学習をさらに深めたいと願っている。温かな交流の中で『気づき』、世のため、人のために何ができるか『考え』、お年寄りのために温かい気持ち、思いやりの心を持って『実行する』ことで、本校の教育目標である『夢を持ち、生き生きと活躍できる心豊かな児童を育成』したいと考え、本活動のねらいを設定した。

具体的な活動内容

４年間、自由な発想で様々な活動を試行錯誤しながら模索してきた。挙げてみると以下の通りである。

あいさつ運動・JRCサポーターメンバー募集、JRC委員会サポーターメンバー登録、・メンバーズカード、バッジの配布・『グループホームほほえみ』との交流活動・「歩こう歩こう運動（廊下歩行）」・「お年寄りを運動会に招待しよう」・「草取り・石拾い運動」・「ハイタッチ、運動」・募金活動「優しさを世界に」・「ありがとうの樹」・「優しさいっぱい運動」・カレーを食べて世界を救おう・車いすプレゼント集会・カンボジアの生徒との交流・中国の児童との交流・ペットボトルキャップ回収・街頭募金（高校生に混じって）・常盤高校との交流

このような中で、柱となる活動が、『お年寄りとの温かな交流』、そして、『空き缶リサイクル』、『車いすのプレゼント』である。この３つは児童の意識の中で相互に関連し合い、大きな成果を上げてきた。その活動の実際を以下に述べる。

活動の実際１…JRC委員会新設・サポーターメンバー制度

本校では、全校児童全員の加盟ではなく、サポーターメンバー制度とし、希望参加にしている。まず、５，６年生各クラス３～４名からなる約30名のJRC委員会が結成される。そしてJRC委員会の呼びかけに賛同してくれる児童を募り、その児童にバッジとメンバー証を発行している。今ではたくさんの児童が加盟し取組に協力してくれている。

JRC委員会発足

JRC委員会を新設するにあたり、学校のきまりを守ったり、元気にあいさつしたりできる児童の育成を目指していた生活委員会を廃止した。当初、ボランティアを活動の中心にしようと考えていたが、生活委員会で行っていた活動の一部を引き継いだ。

・あいさつ運動
・廊下を歩こう運動
・草取り・石拾い・・・等

そこに、JRCの趣旨である『気づき・考え・実行する』主体的な活動を加え、「世のため、人のため、学校のために行動して、学校のきまりを守り、元気にあいさつのできる素晴らしい学校にする」ことを委員会目標として新しい取組を計画した。

活動の実際２…お年寄りとの交流→空き缶回収

（１）お年寄りと交流して（気づき）

児童の思い

・優しいな
・おじいちゃんつらそうだな
・おばあちゃんを楽させてあげたい
・自分たちが何か役に立ちたい
・車いすをプレゼントしたい

児童の気づき

・お年寄りとの交流でお年寄りの障がいに気づく
・お年寄りのニーズに気づく

・インターネット等で調べて気づく

（2）空き缶回収に作戦変更…（考え）

日本赤十字社埼玉県支部の職員から、日赤病院が車いすを作ってもらっている日本シルバーケアでは18,000円で車いすを一台手に入れられることを教えていただいた。そして、アルミ缶をリサイクルの業者に持っていくと1Kgあたり80円から100円で買い取ってもらえることを知った。

そこでたくさんの空き缶を集めるにはどうしたらよいか委員会で話し合い、考えた。

・全校に配布して、取組を知ってもらおう！
・前日には校内放送でアナウンスもしよう！
・現在の状況、目標を知らせ全校のみんなにやる気になってもらおう！

活動の実際３…空き缶回収→車いすプレゼント（実行）

（1） 買い取りの約束

目標にしていた180ｋｇの空き缶が集まったのでいよいよ業者との値段交渉が始まった。１円でも高く買ってくれる業者にお願いしたいと思っていたところ、業者の方が我々の志に感銘を受けてくださり、是非協力したいと高値で買い取ってくれることに話がまとまった。教師と業者で交渉したことは子どもたちに内緒で、委員会の児童に電話をさせ、ドキドキしながら交渉の醍醐味を体験した。

（2）積み込み・搬送

業者さんのトラックで学校まで取りに来てもらった。もちろん積み込みも力自慢のJRC委員会のメンバーが手伝った。軽トラックいっぱいの空き缶の山は壮観だった。

（3）リサイクル

買い取ってもらったアルミ缶はつぶされ固められリサイクルされていく。このときの様子については４年生の総合的の学習の時間でリサイクル業者の社長さんに詳しく教えていただいた。

（4）車いす贈呈式

ついに念願の車いす贈呈の日を迎えた。グループホームから二人のおばあちゃんを招いて全校で贈呈式を行った。

歌や言葉の贈り物、・・・みんなの心・心・心で体育館が温かい空気に包まれた。みんなの小さな善意が車いすという形になったことは大きな感動だった。

車いす贈呈式でのひとコマ

活動のポイント

○総合的な学習の時間の取組への波及

・４年生の「環境」をテーマにした学習では空き缶をリサイクルしている業者の社長さんを招いて、資源回収の話しを聞くことができた。また､「福祉」の学習でお世話になっているグループホームにも２台目のプレゼントすることができた。地域の他の施設とも交流を広げられた。
・５年生の総合的な学習の時間では、救急法の学習を行った。日赤埼玉県支部の職員から新潟の地震で経験した貴重なお話を聞き、なぜ、救急法が必要なのかを学ぶことができた。学習後、日赤から受講証と受講バッジをいただき、喜びをさらに深めた。
・６年生の社会では『世界が100人の村だったら』のお話をもとに、南北問題について考えたり、地雷の被害、少年兵について学んだりした。

○ JRC活動で経験した様々な活動が児童に「考える」きっかけを与えた。各学年の学習に広がっていき、そこでさらに考えを深め、学習することができた。

○双方向の交流活動に発展

・はじめは一方通行だったお年寄りとの交流が回数を重ねるにつれて双方向からの活動へと発展していった。こちらから運動会に招待した後は、コンサートやひな祭りに招待して頂いた。クリスマスや卒業時には､ホームからプレゼントや嬉しいメッセージが届けられる。
・本校で取り組んでいる空き缶回収やペットボトル回収にも進んで協力して頂いている。

○トレセン・赤十字フェスティバル

・リーダーシップ･トレーニング･センターに行って、そこで『赤十字の歴史』『人道』『国際理解』『救急法』など、たくさんの事を学ぶことで、赤十字活動への理解を深めた。また、埼玉県のいろいろな地域で活躍するJRCの仲間たちと出会い、共に生活する中で、気づき、考え、実行することの大切さを知り､そして協力すること､団結することを学んだ。『２学期からはもっともっとがんばろう！！』と決意を新たにした。
・ボランティアフェスティバルや赤十字の集い等に積極的に参加することで、様々な豊かな体験をさせてもらった児童が、それを委員会やクラスのメンバーに広げ、JRC活動を充実させることにつながった。

○地域に広がる活動の輪

ホームページや噂で活動を知った地域の方が協力してくれている。協力の輪が広まり、たくさんのアルミ缶が回収できたので、現在では地域の４つのホームに車いすを贈ることができるようになった。

活動の成果

改革（新しい柔軟な発想）→伝統

○校内募金から街頭募金へ

・今までも新潟県中越地震や四川省の地震、ミャンマーのサイクロンやサモア沖地震、スマトラ沖の地震等、被災者のためにという目的意識を持っての募金活動を行い、校内でたくさんの善意を集めることができた。

・今年度は、高校生が行っている浦和駅で行っている街頭募金に参加した。そこで、世界の恵まれない国ではワクチンの接種ができなくてたくさんの子ども達が命を落としていることを知った。その学習をさらに新しい活動につなげるように考えさせた。

○埼玉県立常盤高校とのコラボ企画

・もっともっとたくさんの人たちを救うにはどうしたらいいか考え、ペットボトルキャップを集め、ワクチンにする活動を始めることにした。どうしたらいいか分からない児童に街頭募金で出会った常盤高校の生徒の方に相談させ、手伝ってもらいながら、活動をスタートさせた。

・バザーの日に常盤高校の JRC 部員に来てもらい、ワクチンについての知識を教えてもらい、ペットボトルキャップ回収の協力を一緒に呼びかけてもらった。

・小学生の子ども達も昨年度から行っている災害時の炊き出しを行い、「カレーを食べて世界を救おう！！」と呼びかけた。カレーを１皿１円以上で販売し、売り上げを恵まれない国へ募金した。活動の趣旨を理解して、１皿 1,000 円で買ってくださる人や、売り切れなのに募金だけしてくれる人もいた。

こうしたチャレンジや新しい取組の積み重ねが、新設校である本校の伝統になっていった！！

カレーを食べて世界を救おう！！

モデル校指定後の変化

自信→意欲

○赤十字思想誕生 150 周年を記念する年に全国赤十字大会で児童が皇后陛下の前で活動発表をさせていただく名誉をいただいた。児童は緊張しながらも堂々と発表することができた。経験したくてもできない貴重な体験をさせていただいた。

○川口市の市長を表敬訪問し、市長さんと親しく会話をさせていただいたり、お年寄りとの交流について書いた作文を朗読させてもらったりした。

○活動が認められ、埼玉教育ふれあい賞を受賞した。その受賞会場で活動を紹介したり、赤十字フェスティバルでも活動発表をしたりする機会をいただいた。

○その他にも「実行」した成果が日赤の広報誌や埼玉新聞等で取り上げられることで、児童が頑張ってきたことに自信を深め、さらなる意欲につなげることができた。

今後の取り組みの見通し

継承と発展

＊せっかくサポーターメンバーになったのに活躍の機会が少ない児童もいたので、もっともっと活動の機会を増やしていけるようにしていきたい。

＊ホームページによる情報発信と児童作成新聞による活動の普及。ビデオカメラ、デジタルカメラの活用。

＊川口市内の小学校や進学する中学校、そして県立常盤高校との実践交流、意見交換を活発に行っていく。

＊現在行っている活動を年間計画に位置づけていく。

＊固定観念にとらわれず、絶えず新しい発想で児童の気づきを大切にした活動を行っていく。

選考委員のコメント

青少年赤十字の実践目標を根底にし、青少年赤十字の態度目標を活動のねらいとした素晴らしい取り組みである。青少年赤十字活動との出会いは比較的浅いが、これまで行われてきた青少年赤十字活動を基盤としながら、自らが気づいた活動の実践を積み重ねるといった創意工夫された取り組みである。JRC 委員会を中核とした活動を推進し、教科等の授業の中でさらに深めている。活動に新鮮味があり工夫されている。今後の活動が楽しみである。また、高校生と“コラボ”した活動は発展性を感じた。

高校生と協力して行った募金活動

豊かな国際感覚をもつ子どもの育成

～国際理解教育を通して～

大阪府　阪南市立東鳥取（ひがしとっとり）小学校

活動の種類	活動の単位	活動期間	教育課程上の主な位置づけ
国際理解・親善	学年	通年	特別活動・総合的な学習の時間・外国語活動

活動のねらい

本校の学校教育目標である『元気で明るく思いやりのある東鳥っ子』をうけ、人権教育の目標を『一人ひとりのちがいやよさを認め合い、互いに支え合い、感動を共有し合える人権学習をめざして』とし、実践を進めている。さらに、国際理解教育を推進し、豊かな国際感覚を持つ児童を育成するために、次の４つの目標を定めた。

1．日本と外国の文化などに興味を持ち、世界に目を向けることができる。（自他国文化の理解）
2．友だちやいろいろな人と協調し助け合うことができる。（世界連帯意識の育成）
3．相手の立場や考えを認め、大切にできる。（基本的人権の尊重）
4．よく考え、意欲的に表現しようと働きかけることができる。（コミュニケーション能力の育成）

具体的な活動内容

低学年の重点目標

世界には様々な言葉や遊び、服装、食べ物、音楽があることに出会うと共に、異なる文化や生活に関心を持つ。日本にも多くの外国の人々が住んでいることを知る。

＜１年＞

■日本の昔遊びをしよう

昔からある日本の遊びを、保護者や地域のお年寄りの方に教えてもらい交流しながらいっしょに遊んだ。活動の後も教室で友だちと仲良く遊び、技を競い合ったり、コツを教え合ったりと、子ども同士のつながりが増えた。

■世界の遊びをしよう

３カ国のゲストティーチャーの方から教えてもらったことを、３つのグループに分かれて、学習参観で発表をした。

最初は、初めてするグループ活動に戸惑っていた様子だったが、友だちと相談しながら練習を重ねていくうちに作りあげていく喜びを感じ、グループで協力して準備を進めていった。発表に向けて実際の民族衣装や国旗を見て絵をかいたり、それぞれの国の言葉であいさつの文字を書き、話す練習もした。

この発表を友だちと楽しくできたことで、人前で話す自信をもてるようになった。

保護者の感想

・発表をリードする子ども達、遊びをリードする子ども達、仲間に気を配る子ども達、それぞれの力が集結すると、こんなに素晴らしいものになるんだと感動しました。
・家でもいろんな国の人が来てくれたことや、遊びや挨拶の言葉などを得意気に話してくれました。
・家でも他の国がどこにあるかなど、興味をもってくれています。

学んだことを発表

■わらべうた・外国のうたを歌おう（阪南市小学校音楽会・学習発表会に向けて）

○わらべうた

古くから歌い継がれてきたわらべうたの中から５曲をメドレーにして歌った。遊びを取り入れ、楽しみながら歌うことができた。

○外国のうた

ALT の先生に発音を教えてもらいながら、「ドレミのうた」を英語の歌詞で挑戦した。

＜２年＞

１学期に、アメリカから一時帰国した友だちのお母さんからアメリカの学校のことや生活について聞かせてもらった。日本とのちがいに気づき、外国に関心をもつことができた。

２学期には、音楽の時間に英語のあそび歌をリズムに乗って楽しんだ。また、英語で自己紹介の仕方を覚えたり、くだものの名前を覚えたりして英語に親しんだ。その後 ALT の先生に来てもらい、歌を歌ったり覚

えていたくだものの名前でフルーツバスケットをしたりして遊んだ。学習参観の日や学習発表会でも自己紹介や歌を保護者の方にも聞いてもらい、英語を身近に感じることができた。

３学期には、国際交流センターの方をお招きし、日本のあそび歌の「かごめかごめ」や「げんこつ山の」、「なべなべそこぬけ」を紹介し、一緒に遊んだ。その後、来られた方に国の話や言葉、遊びなどを教えてもらった。外国の方と出会い、その国のことや言葉などを知ることができ、もっと知りたいという意欲を持つことができた。どの活動も生き生きと取り組めた。

中学年の重点目標

様々な国の文化や生活にふれ、日本の文化や生活とのちがいを認め合うと共に、人間として、共通する思いや願いがあることに気づく。

＜３年＞

１学期にアメリカから来た友だちから朝のあいさつとさようならのあいさつを教えてもらった。その後毎日、日本語のあいさつの後に英語でもあいさつをしている。アメリカのじゃんけんや色の名前も教えてもらうことができた。じゃんけんは日常でも使って楽しんでいる。

２学期には、国際理解教育を進める上で、外国のことを知る前に、まず、自分の国を理解しようとする子どもになってほしいと考え、昔から伝わる民舞に着目した。田畑の豊作や人々の無事を祈るために伝えられてきた踊りを通して、日本に住む先祖たちの深い思いを知ることができた。そして、日本と比べながら、ほかの国の気候や文化の違いなどを調べることで、その国との踊りの違いを感じ取り、違いばかりではなくそれぞれの国の文化や習慣のよさを尊重し、認めようとする態度が見られた。

３学期には、国際交流センターの方をお招きし、その国の踊りと文化を教えていただき、一緒に給食をいただくことにした。交流の前に、それぞれの国の文化や生活を調べ、わかったことを国ごとにまとめ、掲示した。言葉で伝わりにくいことを補うためにはどうすればよいのか話し合い、相手のことを思いながら計画を立てることができた。当日は、子どもたちからは日本に伝わる盆踊りや日本の伝承遊びを紹介し、一緒に楽しむことができた。実際に交流することで、言葉や文化がちがっても心が通じ合うことを学べた交流であった。

＜４年＞

４年生は、「ちがうっておもしろい。」をサブテーマに、国際理解教育に取り組んだ。

アルゼンチン、ドイツ、アメリカ、中華人民共和国などの世界の国々から、自分たちの調べたい国を選び、どんなことを調べるかグループで話し合って課題を見つけ、その国の文化や生活を調べた。子どもたちは、インターネットや図書館を利用し、意欲的に資料を集め、ポスターにまとめていった。その過程で、日本で歌われている歌の中に外国から伝わっているものがたくさんあることを知った。そして、学習参観の日に調べたことを発表したり、外国から伝わってきた歌を保護者の前で披露したりした。

子どもたちは、世界と日本の様々なちがいや共通点に驚き、ちがいを認め、その国の文化や伝統を理解するようになっていった。調べるにつれ、「もっと知りたい。」「大きくなったら行ってみたい。」という感想を持つようになり、「日本のことも紹介したい。」「外国の人と一緒に遊びたい。」との思いを強くしていった。

その後、ALT の先生との交流では、歌を歌ったり、ゲームをしたりして楽しく過ごした。英語をほとんど知らない子どもたちが、外国のことをもっと知りたいという気持ちから身振り手振りを交えて先生と積極的にコミュニケーションをとろうとしていた。

高学年の重点目標

日本と諸外国との関係について学び自分の生活とのつながりを知る。世界には異なる文化、生活、習慣、考え方があることを知ると共に、ちがいや共通点を見つけ、共に生きることの大切さを学ぶ。

＜５年＞

（１）イタリア、北アイルランド、韓国、中国、オランダ、ニュージーランドの方との交流

交流前に、インターネットや図書の本などを活用し、各国についての基礎的な知識を学んだ。そこではわからないことは質問として交流の時に実際に聞いてみることも活動として取り入れた。

各国の方々に来ていただき、それぞれの国の食文化や伝統的な衣装、観光地などについて紹介していただいた。また、日本のことも紹介しようと、紙相撲やけん玉を披露したり、折り紙のプレゼントをしたりして交流を深めた。交流後には新聞を作り取り組みをまとめた。

（２）トピックアルバムの作成と交流

子どもたちは、これまでの交流を通して分かったこと、驚いたこと、日本との違いや似ているところなど、その国々の文化について詳しく知ることができた。しかし、日本の文化について説明することができない自分たちに気づいた。これからは今まで自分の国のことを説明してくれた人たちみたいに、日本のいいところを広められたらいいと思う児童もいた。

そこで、自分の国のことを調べ、わかったことを発信するという活動を取り入れることにした。日本の有名なところや伝統的な衣装、行事について調べたり、身の回りで流行っていることなどをまとめたりして、トピックアルバムにした。トピックアルバムは国際交流学習でお世話になった方々に送った。これらは自分たちにとってもたいへん興味深いものになり、今まで知らなかった日本の文化についてふれることもできた。

各国からゲストティーチャーを招く

（3）青年海外協力隊、日本赤十字社の方々のお話を聞いて

サモアでのボランティア活動のことを中心に説明していただいたり、スマトラ地震の発生後、現地の救援活動に参加したお話をしていただいたりした。現地の生活や学校の子どもたちの様子を映像を交えての詳しい説明を聞く中で、グループで考察し、自分たちの生活と比べて違うところや共通したところについて発表するという活動も取り入れた。また、インドネシアの生活や救護の講習などの話をメモを取りながら聞き、気候の違いや災害後の様子を紹介していただいた。まとめとして新聞を作成した。実体験を通しての日本人としてできることについて話を聞くことができた。今度は、自分にできることは何なのかということに着目することができた。

＜６年＞

子どもたちは、「ようこそコリアンタウン」（にんげん）を読んだり、コリアンタウンのビデオを見たりしながら、隣国である韓国朝鮮の文化やコリアンタウンのことに興味を持った。そして、日本との関係を調べたり、料理を作ったりしながら、改めて距離的に近いだけでなく、歴史的にも現在も関係の深い国であるという理解を深めた。

次に、ALT の先生に、母国北アイルランドの、アイリッシュダンスなど様々な文化やとても美しいすばらしい自然を映像を通して伝えてもらった。子どもたちは、英語の学習に対する意欲が向上したようである。

さらに、国際交流センターの方をお招きし、映像や実物などを見せていただきながら、それぞれの国々の特徴や文化や歴史、日本との関係などの話をしていただいた。そして、子どもたちから、日本の文化の紹介をしたり、一緒にゲームをして交流したりした。また、来ていただいた方々の国々や地域について、さらに自分たちで調べ、新聞づくりをしたり、発表をしたりした。文化や生活習慣などにちがいはあるが、たくさんの共通点もあることに気づき、今度は、実際に行ってみたいという興味や、力を合わせて平和な世界を創っていきたいという願いを持つことができた。

活動のポイント

活動の過程では、子どもたち一人ひとりの思いや願いを大切にしながら、子どもが主体的に活動できるように支援した。そのために、計画、実行、振り返りまでの記録ができるＶ・Ｓカードを活用した。また、日本赤十字社の協力を得て平成 20 年度は、マレーシアの留学生との交流を行った。

活動の成果

・モデル校として指定を受けることで、日赤のネットワークを通じて国際理解教育を推進することができた。
・助成金を活用し、資機材や教材等を購入した。資料の整理や作成が容易になったり、交流会の資料や英語活動の学習教材を作製することができた。

モデル校指定後の変化

日赤のネットワークを通じたり、国際交流センターと連携を取りながら 11 カ国の方々と交流がもてた。アジア地域だけでなく、子どもたちがそれまであまりなじみのなかった国の方とも交流することができた。物語教材や資料学習からは得られない、人との出会いからもたらされる喜びや、本物と出会うことの感動が子どもたちの学習意欲につながったように思う。また、子どもたちは新しい発見をしながら、興味、関心を膨らませ、意欲的に学習に取り組むことができた。そして、他の国の生活や文化を知ると共に、自分たちの国や地域のよさ、特徴について再確認することができた。また、一人ひとりのちがいやよさを知り、相手の立場や考えを認めることの大切さを感じることができた。

今後の取り組みの見通し

赤十字のネットワークを活かして、「健康･安全」「奉仕」「国際理解・親善」の活動を継続、発展させる。

選考委員のコメント

国際理解教育を推進するにあたって、赤十字のネットワークを生かした取り組みである。数多くの世界の人々の生活や様子について、身近な世界の国々の人々と交流することで体験を通して理解することができる取り組みである。子どもたちの主体的な活動を取り入れることによって、自然に相互理解することができる。子どもたちの願いや思いが効果的に実現できる素晴らしい取り組みである。国際的な視野にたって活動する人が育成される期待感の持てる活動である。

興味深げに説明をきく児童たち

思いやりと奉仕の心を持った児童の育成をめざして

～自ら考え、実践するJRC活動の工夫～

長崎県　長崎市立戸石（といし）小学校

活動の種類	活動の単位	活動期間	教育課程上の主な位置づけ
奉仕	全校	通年	生活科・総合的な学習の時間

活動のねらい

・奉仕の精神を身につける。
・体験活動を通して、気づき、考え、実行することのプロセスを身につける。

具体的な活動内容

1．野菜作り・収穫・販売（ふれあい農園での活動）

（1）いもの苗作りを行う。
（2）畑作り・草取り・畝作りを行う。
（3）いもさしを全校児童で行う。
（4）担当のいも畑の草取りを各学年で行う。
（5）全校児童で収穫を行う。
（6）袋詰め等を行い、戸石っ子まつりで収穫したさつまいもの販売をする。
（7）販売収益金を日本赤十字社長崎県支部に寄付する。
（8）各学年でだいこん、長崎高菜、ほうれんそうなどを栽培し収穫する。
（9）婦人会の協力を得て、５年生が収穫した長崎高菜を高菜漬けにする。

2．校内研究でJRC活動を教育課程に位置づけ、生活科や総合的な学習の時間のカリキュラムの開発をした。

3．V・Sカードや V・S掲示板の活用方法を工夫することにより、V・S活動が活発になるようにしてきた。

活動のポイント

・V・S掲示板を活用し、JRCの実践活動を賞賛する掲示物を貼ったり、児童集会等の活動を自分たちで呼びかけて一部運営したりするなどしてきた。
・自分たちの活動が、世界中の困っている人たちを救うことに役立てられることを、子どもたちが理解できるようにしてきた。
・漬け物作りは、地域の婦人会のみなさんに協力してもらった。
・いもづる作りは農作業に詳しい地域の方に協力してもらった。

いもほり

活動の成果

・自分達の活動が、世界中の困っている人々の支援の一助になっていることを理解し、広い視野に立って、国境や人種にとらわれない意識をもつ一つのステップとなっている。
・ふれあい農園での活動を地域の方たちが見て、農作業の仕方を教えてくれたり、農作業や漬け物作りの手助けをしてくれたり、農作業中の職員や子どもたちに励ましの声をかけてくれたり、地域のスーパーマーケットで収穫した野菜などの販売を協力してくれたりするなど、地域とのつながりがこれまで以上に強固なものとなってきている。
・野菜を育てることにより、生長の喜びや生命の大切さ、自然の恵みや協力してくれる方たちへの感謝の気持ちをもつことなど、子どもたちの心の成長に大変役立っている。
・モデル校として指定を受けることで、校内の協力体制が確立し、青少年赤十字活動を実施する上で指導者間の連携がより密接に図られるようになった。
・保護者や地域の人々がふれあい農園の活動を好意的に受け止め、農業指導をしてくれたり、農作業を手伝ってくれたり、農作物の販売や購入に協力してく

れたりする。
・ふれあい農園の活動を通して、農作物の生長や収穫の喜びを味わい、自然の恵みを感じたり、作業の仕方を教えてくれる人への感謝の気持ちをもったりする児童が増えた。

街頭での募金活動

モデル校指定後の変化

・JRC 活動を校内研究の研究テーマとしたことで、職員が JRC 活動の意義を再確認し、児童が主体的に活動に取り組むための方策を立て、実践してきた。
・進んで V・S 活動に取り組む児童が多くなり、笑顔で活動している様子が見られる。
・V・S 活動の活動内容を広めることで、活動内容を児童が理解し、活動の幅が広がり、何をしたらよいかわからない児童が少なくなった。
・上級生が下級生を思いやる姿が垣間見られるなど、思いやりの気持ちが育ってきている。
・青少年赤十字に全校加盟して十余年となり、１年生の時から V・S 活動について学習しているので、V・S 活動をすることは当たり前という意識をもつ児童がほとんどであり、奉仕の心が高まっていると思える。
・V・S 掲示板が整備され、学校生活をよりよくしようと、児童が主体的に活用するようになってきた。
・自分たちの活動が、日本赤十字社を通して、世界のどこかで生かされているということを意識する児童が増えた。

V・S 掲示板

今後の取り組みの見通し

活動の種類を「奉仕」から「健康･安全」「国際理解･親善」にまで広げ、青少年赤十字活動を通して、学校教育活動全般を活性化するための年間計画を作成し、取り組んでいく。

赤十字のネットワークを活かして、賛助奉仕団や地域の赤十字奉仕団の協力を求めていく。

選考員のコメント

広大な学校園を活用し、各学年が多種の野菜作りを行い、生産・加工・販売を地域の協力を得て取り組む活動は素晴らしいものである。また、JRC 活動を明確に教育課程に位置づけた取り組みで、カリキュラム開発は他校の模範となるものである。

青少年赤十字活動の手法（掲示板の取り組み）を活用して、積極的なボランタリー活動に取り組むことによって、子どもたちの気づきが育まれ、子どもたちの気づきの芽が育っている。

「自ら学び、気づき考え、実行する児童の育成」

友だち・もの・自然・人との関わりを通して

香川県　高松市立檀紙（だんし）小学校

活動の種類	活動の単位	活動期間	教育課程上の主な位置づけ
奉仕、健康・安全、国際理解・親善、その他(学校の特色)	全校　学級	通年	各教科・道徳・総合的な学習・特別活動

活動のねらい

本校の伝統として受け継いできた、ボランティアタイムを見直し、自分たちがより主体的に参加できるようにする。

また、教科学習や総合的な学習で学んだことを、全校生や地域に発信したり、考えたことを実行に移したりと、今の自分にできることを念頭に置いて校内外で活動する。

具体的な活動内容

1　健康・安全

①すこやか調べ

毎月１週間、７つの項目（睡眠、朝食、ゲームの時間等）について振り返り、生活のリズムについてチェックする。自分の反省や保護者からの感想を書き込んでもらうことで、家庭を巻きこんで生活習慣について見直す場となった。

②食育指導

学級活動や家庭科の時間に、「生活習慣病について知ろう」、「朝ごはんで元気一杯大作戦」等の授業を、学校栄養職員と学級担任がチームティーチングで行った。専門的な立場から、生活習慣病が生活習慣や食習慣が影響していることや、朝食の効果や働きについて話をしてもらうことで、朝食の大切さを感じることができた。また、「我が家の朝食レシピ」を募集し家庭との連携を図った。

学校栄養職員との授業

③命の集会

６月を命の月間として学んだこと、感じたことを発表する場を設けた。全校が同じ時期に、命を中心課題として、教科、総合的な学習、道徳等を関連づけて密度の濃い学習を進めることで、児童は命に対する感じ方、考え方を深めることができた。

2　奉仕

①朝のボランティアタイム（7：55～8：05）の取り組み

委員会が中心となって活動を計画し、JRC 掲示板等を使って全校生に呼びかける。毎朝のボランティアタイムの音楽が流れると、児童は、自分の関心のあるところでボランティアに参加する。校庭の掃きそうじ、花の世話、あいさつボランティア、モーニング檀（玄関のところでピアノ伴奏に合わせて歌を歌う）など、たくさんの児童が参加した。

②ハッピーデー

４年生の総合的な学習で福祉について学習している。そこで、車いすを地域のデイサービス施設に送りたいと、毎週水曜日をハッピーデーとし、プルタブやペットボトル、お花を集めている。お花は学校のいろいろなところに飾るとともに、施設にも贈った。

③委員会のアイデア活動

委員会の特徴を生かし、自分たちから考えたアイデア活動を発信している。例えば、「スマイル委員会」が「あいさついっぱい、笑顔いっぱいの学校」をめざして、何をしたらいいかを考え、あいさつ隊を結成することにした。朝、あいさつ隊のたすきをかけ学校中を回っていると、たくさんの児童があいさつ隊に参加し一緒にあいさつをしている。その他にも、「スポーツ・セーフティ委員会」が入学したばかりの１年生に、正しい遊具の使い方を教えたり、「エンジョイ委員会」がみんなに楽しんでもらおうと、お楽しみ集会を計画、運営したりした。昼休みには様々な取り組みが提案され、楽しそうに活動している姿や笑顔が見られた。

④ペア活動

みんながなかよく助け合いながら活動できるように、１年生と６年生、２年生と４年生、３年生と５年生がペアを組み、活動を行っている。運動会では、ペアの競技種目をしたり、プール開きや読み聞かせ、団の活動に招待をしたりする学年横断的活動を通して、相手のことを思いやることの大切さを感じることができた。

正しい遊具の使い方を１年生に説明

３　国際理解・親善

①地域を知る

地域に伝わる伝統・文化を大切にしたいと、３年生の総合的な学習では、地域の伝統文化を知り、地域が好き、地域に誇りをもてるようしたいという思いを大切にした。地域に伝わる文化を知るために、地域の方から話を聞いたり、実際にその場に見学に行ったりした。

②世界に目を向ける

中学年で、地域を大切にした取り組みを重ねていき、６年生では、地域から世界へと視野を広げるために、世界のことを知り、国際的な協力と連帯の大切さに気づき、自分でできることを考え、行動に移す学習に広げていった。

６年生の総合的な学習では、まず、世界を知るために、国際交流員の方や日本赤十字香川県支部の方との交流活動を行い、世界の様子を知ることから始めた。

そして、そこから自分たちは何をすることが必要かを考え、「アジアスマイルプロジェクト」という活動を進めることにし、募金活動、書き損じはがきや使用済み切手の回収、絵本作りなどの活動を行った。

募金活動

４　特色ある活動

本校には「壇(まゆみ)千人がま」という大きな窯がある。古く、檀紙地区には、みまや焼きのふるさととして、たくさんの窯が築かれたが、戦後町のすべての窯の火が消えてしまった。そこで、窯の火を復活させたいと、地域と学校が一緒になり、自分達の手で窯をつくることにした。レンガ作りから作業を始め、１年半の期間と、延べ人数1,200人もの人々に支えられ、窯が完成した。千人以上の人がかかわったことから、「壇千人がま」と名付けられた。

毎年11月には、「ドッキリドキ土器フェスタ」を催し、地域の方々や保護者のボランティアの方の指導を受けながら、みんなが自分だけの作品を作る。そして、窯の火入れも地域の方々や保護者の力を借り、夜を徹して行われる。出来た作品は，大切に使っている。この活動は、教育課程の中に位置づけ、道徳、総合的な学習、特別活動とも関連を図って継続されている。

地域の人々に暖かく見守られ、これからも受け継いでいく伝統文化である。

ボランティアの方たちとの土器作り

活動のポイント

ボランティアタイムに関しては，委員会ごとに活動の在り方を見直し、全校生で学校をより積極的に取り組めるよう、関連する委員会が中心となって活動を進めた。

また、学習の一環として、地域の歴史に詳しい方や専門的な立場のかたをゲストティーチャーとして招いて交流したり、体験したりすることにより、児童の学びをより確かなものとし、次の活動への意欲を高めた。

活動の成果

委員会活動では、アイデア活動を行うことで、児童が様々なアイデアを出し合い、主体的に活動するようになってきた。また、活動することによって他の児童の笑顔や反応により、満足感や達成感を得ることができ、より活発な活動につながってきている。

ボランティア活動に関しては、放送を使って参加を呼びかけたり、掲示板を利用して活動の様子を知らせたりすることにより、参加者が増えていった。特に、低学年児童も誘い合って参加し、朝から明るいあいさつの声が聞かれたり、自分で考えたボランティアをする姿がよく見受けられた。

中学年で地域に目を向け、地域の学習を大切にしたことで、ふるさとが好きで伝統を受け継ごうという意

識をもつことができた。高学年では地域を起点にして視野が広がり、世界にも目を向け興味が持つことができるようになったことで、そこから自分たちでできることを考え、実行に移すことができた。

モデル校指定後の変化

JRC の態度目標を生かす、児童主体の活動が活発になった。

・委員会活動の活性化、多様化
・ボランティア活動の拡充、学年の隔てない集団活動の活性化関連を図った教科・道徳・総合的な学習・特別活動の工夫がみられた。
・発展する学習の展開
・地域に根ざした特色ある体験学習、活動＜檀 (まゆみ) 千人がまによる、みまや焼きづくり＞を継続することで意識づけができた。
・地域の伝統文化や世代を超えた人と人の心のつながりを継承しようとする意識づけ

今後の取り組みの見通し

・「気づき・考え・実行する」という青少年赤十字の態度目標の精神を、教科や他の活動にさらに活かすとともに、子どもの自主的活動を促す、教育活動の場や方法、手段を検討・実践していく。
・「国際理解・親善」を今年度新たに取り入れたことを機に、今年度の取り組みを踏まえて、年間計画の見直しとともに、「健康・安全」「奉仕」の活動内容の見直しを行い、より充実したものにする。
・「赤十字のネットワークを活かして、賛助奉仕団や地域の赤十字奉仕団の協力を求め、活動の幅を広げていく。

選考員のコメント

地域の自然と歴史や文化を大切にした特色ある教育活動を展開し、地域に根ざした青少年赤十字活動が展開されている。特に「檀千人がま」による「みまや焼きづくり」は、地域の伝統文化や世代を超えた人と人の心のつながりを継承する素晴らしい取り組みである。

また、青少年赤十字の３つの実践目標達成のための取り組みは、学校の特色を生かした取り組みで、青少年赤十字のノウハウを活用した素晴らしい取り組みで、他校の取り組みの参考になる画期的活動である。

中学校・
中等教育学校の部

心豊かに、ともに支え合うために

～施設との交流を通して～

北海道　遠軽町立安国（やすくに）中学校

活動の種類	活動の単位	活動期間	教育課程上の主な位置づけ
健康・安全・奉仕	全校	通年	総合的な学習の時間・部活動

活動のねらい

遠軽町安国地区は福祉施設が多いという特性がある。子どもたちは、小さなころから、福祉施設や障がいを持ちながら生活している人々との接点も多く、偏見を持つことなく、障がいを持った人々と接することができている。

環境の特性を生かし、様々な交流を通し様々な経験を重ねることで、より深い心のつながりが持て、お互いに支え合うことができるような関係構築のきっかけになればと考えた。

具体的な活動内容

1　児童福祉施設ひまわり学園との交流（総合的な学習の時間　12時間）

（1）出前講座：手話（平成21年7月6日）

北見ろうあ福祉協会会長、手話通訳の方の２名に来校いただき、手話についてのレクチャーと実技指導を行っていただいた。

手話を行う時に気を付けなければならないことや簡単な表現について理解を深めることができた。

手話を学ぶ

（2）ひまわり学園を訪問（平成21年7月2日）・ひまわり学園生を招待（平成21年11月26日）

安国地域にある知的障がい児施設ひまわり学園生と交流をもつことができた。７月にひまわり学園職員が準備した内容でゲーム等の交流を行い、11月には、生徒会役員が中心になって企画・運営を行い、楽しく交流することができた。

（3）ひまわり学園生との交流（野球・ソフトボール）

土曜日・日曜日を利用し、ひまわり学園生と安国中学校生徒で野球の試合を通して交流を深める機会を持つことができた。

2　老人クラブとの交流（総合的な学習の時間　4時間）

（1）百人一首について学び、実際に体験する。（２時間）

（2）老人クラブの方を招待し、百人一首を通して交流を深める。（２時間）

地域の老人クラブの方をお招きして、10月に百人一首大会を開催。

６つのグループに分かれ楽しく交流することができた。

老人クラブとの交流（百人一首）

3　二校交流会（総合的な学習の時間　6時間）

生田原地域の中学校である、本校と生田原中学校とが、１・２学年ごとに交流を行った。

（1）二校交流会について知る（1時間）→学習のねらいと交流会の流れを確認し、準備が必要な事柄や係分担を検討する。
（2）各係からの原案提示・検討（1時間）→各場面を担当する係が運営方法を提案し、共通理解を図る。
（3）リハーサル（1時間）→運営方法の共通理解のもと、実際に行動しながら、修正を加える。
（4）二校交流会（2時間）→各学校で計画してきたことを通して交流を深める。
（5）ふりかえり（1時間）→個人反省・係反省を行うとともに、寄せ書き等相手の学校へふりかえった思いを伝える。

4　リコーダー部による地域行事や施設訪問演奏

過去 11 回、全国大会出場経験をもつ本校リコーダー部は、地域行事での演奏や福祉施設を訪問しての演奏活動を行っている
平成 22 年 3 月 28 日 (日) 第 31 回全日本リコーダーコンテスト出場（東京）

（1）地域行事
・安国野外音楽祭 (6/28)
・小さな音楽会 (9/27)
・安国演芸会 (3/7)

（2）施設訪問
・介護老人保健施設
プライムいくたはら (7/4)
・ディサービス遊らいふ (8/5)

（3）演奏会招待
・リコーダー演奏会：
北海道紋別養護学校ひまわり学園分校生を招待 (7/23)

活動のポイント

【V・Sの活用】

地域には障がいをもった人々がたくさん生活をしている。子どもたちは、そんな環境の中で育ち、「共に生きている」という認識がある。障がいをもった人々に対しても、特別な意識はなく、日常生活の延長上の活動となっている。

【活用した人材】

昨年度は、北海道盲導犬協会から講師を派遣していただき、盲導犬と視覚障がい者の現状等についてレクチャーをしていただいた。

今年度は、ろうあ協会の方と手話通訳の方にお越しいただき、手話とその留意点等についてレクチャーしていただいた。

活動の成果

これまで、障がいのある人々と日常的に関わりを持ちながら成長してきた生徒にとって、モデル校の指定を受けたことは、改めて障がいをもつ人々への関わりの大切さに気づく貴重な機会となった。

助成金を活用して、デジタルカメラを購入、生徒会活動などで利用することにより、交流活動の準備や記録など、視覚的な工夫に自ら取り組むことができた。助成金を活用することにより、リコーダー等を購入。使用年数の限界を超えていた楽器と交換できたことで、よりよい演奏を行うことができた。今年度も全国大会出場 (5 年連続) を果たし、地域をはじめこれまで訪問した施設などからも多くの声援を頂いてきた。地域からは、「この小さな地域である『安国』という名前を全国に響かせてくれた。」と感謝の声をいただいている。

リコーダー部による演奏会

モデル校指定後の変化

障がいをもつ人々への関わり方の大切さに、改めて気づく貴重な機会となった。

助成金で購入したリコーダー等での演奏は、表現の幅もより広がり、より多くの人々に感動を与えることができた。

今後の取り組みの見通し

・今後も今年度までと同様に、『健康』『安全』『奉仕』の活動を地域に根差した取り組みとして継続させていきたい。
・赤十字のネットワークを活かして、賛助奉仕団や地域の赤十字奉仕団の協力を求めるなど、活動の幅が広がるよう努める。

選考員のコメント

「心豊かに、ともに支えあるために」をテーマとして、地域の福祉施設との交流や行事への参加等を中心として取組が進められている。総合的な学習の時間の題材として地域の特性である福祉を選び、JRC との関連を持たせた学習は、より一層、障がい者理解や地域理解に成果をあげている。地域社会からの感謝の声とともに、JRC 活動の推進の仕方の方策としても参考になるものである。

『思いやりの心を持ってみんなのために』

福祉No.1の学校にしよう

福井県　勝山市勝山北部中学校（かつやまほくぶ）

活動の種類	活動の単位	活動期間	教育課程上の主な位置づけ
奉仕	全校	通年	総合的な学習の時間・学校行事

活動のねらい

生徒会活動として校地内外や近隣のバス停の清掃活動等に取り組んだり、学校行事として全校奉仕活動に取り組んだりすることで、青少年赤十字の理念を学び、思いやりの心を育てる。

具体的な活動内容

◎全校奉仕活動

学校周辺の清掃や地域の施設などでの奉仕作業を通して、奉仕の態度や心情を育むとともに、地域の一員としての自覚を持たせる

・１年生：校区内３カ所の福祉施設での奉仕活動及び交流活動
・２年生：校区内２カ所の駅舎の清掃活動
・３年生：校区内３カ所の公民館の清掃活動

平成 20 年度には上記のよう活動を行った。21 年度は、インフルエンザの影響で、１年生は校内清掃と福祉施設との間接交流（ビデオレター等）、２年生は駅清掃、３年生は中止と内容を変更した。

本校では黙働清掃に力を入れているが、そこで得た奉仕の精神が、この活動にも十分に生かされていた。どの生徒も真面目に仕事に取り組み、きれいになったことに喜びも感じていた。

勝山北部中駅の掃除

◎ JRC 委員会によるチョボラ活動

「福祉 No.1 の学校にしよう」のスローガンのもと、生徒による自治的、自発的な活動を重視することで、福祉に関しての意識を高める。

・バス停の清掃
・エコキャップ運動
・学校祭におけるチャリティーバザー

◎福祉体験

体の不自由な人を疑似体験することで、その大変さと想いを知り、介護の気持ちを育む。

・総合的な学習の中での教材化
・社会福祉協議会の方をゲストティーチャーとして招き、「アイマスク体験」「シニア体験」「車いす体験」のローテーション活動

◎啓蒙活動

赤十字活動に関する様々な情報や取り組みを紹介することで、福祉の心を育む。

・パネル展示（北部中の福祉活動）
・委員会発表（３人の偉人と赤十字の理念）
・赤十字のマークをつけての挨拶運動

◎地域行事への参加（役員　ボランティア）

年末の募金活動をきっかけに、困っている人を助ける方法がないか話し合い、エコキャップ運動を展開することになった。800 個で一人分のワクチンを買えることから、「エコキャップを集めて 100 人の命を救おう」のスローガンをうちたてた。５倍アップの 5,000 個に到達することができた。意識は JRC 委員会にとどまらず、この運動が終わってからも次々とエコキャップがとどけられた。福祉の心がつながった一瞬だった。

活動のポイント

PTA 行事で、盲目のピアニストをお呼びして、演奏会と講演会を行った。また、１年生の「総合的な学習の時間」では、勝山市社会福祉協議会の方をゲストティーチャーとして迎え、車椅子やアイマスクなどの福祉体験を行った。バーチャルではなく、本物にふれることで生徒の赤十字に対する意識も高まったと考える。

１年生の交流活動

活動の成果

全校奉仕活動や福祉体験を年間計画に位置づけ、３年間継続したことで、「今年は○○だ」という期待感を持たすことができた。また、先輩からアドバイスをもらうなど縦のつながりも深まった。その結果、どの生徒も意欲的に取り組み、活動に対する充実感を味わうことができた。さらに、どんな活動ができるか生徒自身に考えさせ計画させることで、自分たちでアポをとるなど、生徒の主体性も育てることができた。

委員会活動では、バザーやエコキャップ運動など、全校に働きかける活動を、より多く展開してきた。その根底にあるのは、困っている人を助けようという願いである。活動の冒頭では、だれを助けたいかの趣旨説明を、終了時には、どれだけ役に立ったかの結果報告をきちんと行った。その思いは、生徒たちに確実に理解されてきている。

バザーの様子

モデル校指定後の変化

地区体育祭や雪祭り、ふれあいフェスタなどの地域行事にボランティアスタッフとして参加する機会があった。最初の頃は少人数だったが、友だちが友だちを生み、２年後には多数の生徒が参加するようになった。

今後の取り組みの見通し

今後の課題

赤十字の７つの原則は「人道」「公平」「独立」「中立」「奉仕」「単一」「世界性」である。これらの原則が何を意味しているか、中学校生活と照らし合わせながら、生徒たちに考えてさせてみた。そこで得た答えが以下のとおりである。

「人道」・・・いつでも相手の立場を考えやさしくすること
「公平」・・・相手が誰であろうと同じように仲良くすること
「独立」・・・自分の考えをしっかり持ち、冷静に物事を判断すること
「中立」・・・友だち関係に左右されることなく正しいと思うことをつらぬくこと
「奉仕」・・・係の仕事やそうじなど、みんなのために働くこと
「単一」・・・「みんな友だち」という気持ちでたくさんの人と仲良くすること
「世界性」・・物事を様々な観点から考え、よりよい答えをみつけようとすること

「福祉」と聞くと、他の人のこと、特にお年寄りのことというイメージが強い。もちろん他との関わりが強いものであることは間違いない。そういった活動を数多く選択してきた。しかし、上記の解明のとおり、実は自分たち自身の問題でもあることに気づいた。来年度からは、視点を自分たちに向け、自分たち自身の心を豊かにする実践活動を考えていきたい。

選考員のコメント

「思いやりをもってみんなのために」をテーマとして、奉仕活動、福祉体験、啓蒙活動、地域行事参加等、多様な取り組みが積極的に行われている。どの取り組みにおいても目標がしっかりと示され、生徒による主体的な活動が行われている。これらが年間計画に適切に位置づけられたことで、より成果があがり、生徒の主体性が育ってきたことがわかる。JRC が目指すものと一致するすばらしい実践である。

自問する力を生かしたJRC活動の推進

～V･S活動やJRC学習を通して～

鹿児島県　霧島市立福山（ふくやま）中学校

活動の種類	活動の単位	活動期間	教育課程上の主な位置づけ
健康･安全　国際理解･親善 奉仕　赤十字の理念の学習	全校･学年	通年	総合的な学習の時間･生徒会活動

活動のねらい

1．平成11年度から青少年赤十字活動に参加してきた。しかし、活動が形骸化してきた面もあり、活動を活性化させ主体性を持たせるために、平成17・18年度青少年赤十字研究推進校としてJRC委員会を中心にV・S活動などに取り組み、「気づき」･「考え」･「実行する」生徒を育成してきた。

2．小規模校である本校を卒業して大きな集団に進んだとしても卒業までに主体性が育成されれば、生徒たちが社会に出て様々な課題に直面しても、よりよく解決でき、社会に貢献できる人間になれるのではないかとの考えで「自問教育」に取り組んできた。JRC活動はそのことと相通ずる部分があり、地域や社会に視野を広げ、自分自身にできることを考え、実行することで地域社会に貢献し、地域社会を構成する一員であることの自覚を高めるとともに、ボランティア精神を養い、自分づくりに役立てている。

具体的な活動内容

1　1年JRC学習（総合的な学習の時間）

1年生全員を対象に、実践目標に沿ったガイダンス的な学習（校内トレセン、心肺蘇生法・AED講習、災害救助品集め、海岸清掃、地雷についての学習など）を実施した。また、ガイダンス的な学習で学んだことより課題を設定し、課題解決学習としてボランティア等に取り組んだ。

1年生のJRC学習

2　V･S（ボランタリー・サービス）活動

(1)　JRC委員会による自主的な活動運営

各学年代表2名（男女総務）から組織されるJRC委員会が、自主的に日程やグループ調整などを行い年間2回（7月・2月）のV・S活動を企画運営した。（平成21年度は、7月には専門部単位の縦割り班で，2月には事前のニーズ調査によるグループ分けで実施した。）また、3年生の呼びかけによる自主的なV・S活動（窓の掃除等）も見られた。

(2)　ニーズの発見（気付き）

地域社会や日常生活から、生徒自身が「気になること」や「自分にできること」を探したり、地域社会のニーズを発見するために地域の方々に相談したりした。また、JRC委員が事前にニーズの例を提示して会員への啓発を図り、気づくことの大切さを確認した。そのことは、2回目の2月の活動に成果が表れたように感じられた。

(3)　計画・準備（考え）

個人やグループで当日の時間帯や天候など考慮し、企画・立案した。事前に了解を得る必要があることについては生徒自身で主体的に考えたり、週に1回の生徒会タイムを活用して担当職員と連携を図ったりして、地域の方々と連絡を取り、必要な用具などを準備した。

(4)　活動（実行する）

第1回（7月）は落葉拾いやごみ拾い、花の提供や花壇の手入れ、ロードミラーの点検、幼稚園の手伝いやデイサービス訪問、高齢者宅の手伝いなどを専門部ごとに実施し、第2回（12月）は地域の神社や道路の掃除、学校前の海岸清掃や公衆トイレの掃除、敬老会と共同での公園の花植え、グループホームの手伝い、お見舞いカードの作成など、グループごとに取り組んだ。

3　自問清掃の実践（清掃時間）

「気づき・考え・実行する」生徒の育成を目指し、清掃開始5分前に作業場所に座り、「掃除をする気があるかないか。」自問し、①我慢とやる気の意志力（他人への迷惑に気づき、しゃべらず清掃に集中する）②黙っていても、どれほど人の心を汲む気働き（ともに清掃する人の心を汲み取り行動する）③最後の一分まで仕事を見つけとおすことを課題とする（最後まで仕事を見つけようとする）④目を内に向け、感謝の気持

ちで働けるかを自問する（感謝の気持ちで作業する）⑤いっさい自分自身の心を尺度にして正直に過ごす（正直に行動する）ことを目標に、掃除しながら自問して考え、自問して行動（清掃）し、生徒自身が自分の心を磨いている。

4　その他の活動

(1)　千葉県交流団との交流

夏季休業中に本校を訪れた千葉県 JRC 交流団と研修交流会を実施し、お互いの活動を紹介しあったり、活動の課題を話し合ったりした。

千葉県のメンバーとの交流

(2)　非常炊き出し訓練

文化祭において、地域の方々も含め全校生徒で炊き出し訓練を行い、日赤の活動の啓発を図った。

活動のポイント

1．V･S活動をはじめ、地域と関わる活動や行事には、公民館長や自治会長、地域の方々や保護者と連携を図り、協力をいただいた。
2．1年生 JRC 学習の地雷に関する学習や心肺蘇生法、全校生徒による文化祭での非常炊き出し訓練等では、日赤鹿児島県支部に協力をいただいた。
3．JRC 指導資料等を活用して事前に研修を深めたり、夏季休業中の職員研修において、1年 JRC 学習の校内トレセンなど実際に3年生に協力してもらい指導する側の研修を深めたりした。

V･S 活動

活動の成果

1．JRC 委員会の位置付けがより明確となり、担当する生徒もより一層意欲的になり、活動の積極性や創意工夫、自主的な活動等が見られるようになった。
2．JRC 活動の目標や活動のねらいを確認することを通し、改めて自分自身に問い直す「自問」する意識付けが定着し、本校の特色ある教育活動である自問教育との関連を図り、職員も意識を高め取り組むことができた。
3．清掃による「奉仕」ばかりではなく、今の自分たちにできることは何かを考えることにより、グループホームなどの福祉施設での活動に幅が広がりつつある。総合的な学習の時間の見直しによる職場体験学習の2年生への移行に伴い、3年生で福祉体験学習を入れるなど、JRC の体験を他の活動でも生かしていけるように計画している。
4．運動会や文化祭における募金活動など、学校行事における生徒の主体的な活動などに、JRC 活動を通して学んだことが生かされつつある。また，そのことは学校便りを通じて保護者や地域へも報告し、啓発を図るよう努めている。
5．日赤からの助成金により備品等が整備され、活動内容を充実させたり、活動の記録をしっかり残せるようになったり、有効に活用させていただいた。

モデル校指定後の変化

1．モデル校の指定を受けることにより、生徒・職員の意識がより一層高まり、積極的な活動を模索する姿勢が感じられた。
2．助成金により備品等が充実し、モデル校以前よりも活動環境が整備された。
3．JRC 活動で学んだ奉仕的活動など、平成24年度新学習指導要領の完全実施に向け、3年生の福祉体験活動など教育課程に組み込む予定である。

今後の取り組みの見通し

1．これまで取り組んできた JRC 活動を教育課程の中にしっかり位置付け、継続的に取り組む予定である。そのために、モデル校指定以降も日赤鹿児島県支部の資料や人材等の活用を積極的に行い、連携を継続させ活動を充実させていきたい。
2．JRC 委員会と生徒会の活動内容を区分し、年間を見通した生徒集会の JRC コーナーや学校内の設営、自主的なV・S活動の運営に努め、生徒の主体性を生かした定期的な活動の充実を支援したい。
3．自問教育とともに JRC 活動を本校の特色ある教育活動に位置付け、教職員の異動に伴う共通理解を充分行い、全校体制で JRC 活動に取り組めるようにして活動の充実を図りたい。

選考員のコメント

「自問教育」の推進に取り組んでいる中、JRC との共通点を見いだし、より効果的な取組になるよう様々な工夫が行われている。特に1年生全員を対象とした JRC 学習は、JRC 理解を促進し、今度の活動推進の基盤になっている。中でも、自問清掃の実施は、JRC の態度目標である「気づき、考え、実行する」の育成に大きく寄与しており、特徴的な取り組みとなっている。

「いのちの学習」「学校・地域を磨く日」

「花や野菜の栽培を通して、いのちについて学ぶ」「清掃活動を通して奉仕の心を学ぶ」

神奈川県　横浜富士見丘（ふじみがおか）学園中等教育学校

活動の種類	活動の単位	活動期間	教育課程上の主な位置づけ
奉仕、その他	学年	通年	道徳

活動のねらい

1．「いのちの学習」について

本校の校訓「敬愛、誠実、自主」の一つである敬愛の精神を、植物を育てること、またそれを食することを通して生命の大切さを実感させることで、自他に関わらず命を大切にすること、ひいては仲間を大切にすることを学習させたい。

出来上がった花や野菜、特に野菜に関しては、自分たちで育てた野菜の「命をいただく」ことを通して、われわれは他の生物を食べて自らの命を維持していることに気づかせる。

それとともに、たとえ畑という小さな人工的環境の中でも、自然界と同様な食物連鎖や物質循環が、いろいろな生物によって営まれていることを環境教育の視点から学習する。

また、ほとんどの生徒がこれまでに経験したことのないさまざまな農作業を通して、与えられた仕事を最後までやりぬくことの尊さや、しかしながら、物事は必ずしも計画通りには進まないこと、そして、それでもあきらめずに粘り強くものごとに取り組むことの大切さ、さらには、途中過程で問題が生じた場合、それを打開するための方策をみんなで考えることを通して、話し合いのルールとマナーを含めた会議の進め方を学ぶ場としたいと考えた。

2．「学校・地域を磨く日」について

生徒にとって、毎日生活している中で日頃は掃除の手が行き届かない場所や、通学路とその周辺の地域を清掃する奉仕活動を通して、奉仕の精神を育てるとともに、社会的な貢献の意味を考えさせる機会とする。

具体的な活動内容

1．「いのちの学習」について

農作業を通した命の学習という観点から、花や野菜を育てる活動を行った。具体的な活動内容は以下の通りである。

①活動の種類

その他 (人権学習)

②取り組み単位

中等１年生及び２年生でこれを行い、取り組みの単位は学年である。

初年度（平成 20 年度）は中等１年生で野菜（大根）を、２年生で花（パンジー）を、２年目（平成 21 年度）は１年生で花（コスモス）を、２年生で野菜（夏野菜として大根と胡瓜を、秋野菜としてじゃが芋、ブロッコリー、白菜、里芋）を教材として扱った。

③活動の時間的な流れ

４月

〔初年度は１年生・２年生ともに　２年目は１年生のみ〕事前指導として、命の連続性についての講座を開いた。その中で、われわれは他の生物を食べて自らの命を維持していることに気づかせるとともに、畑という小さな人工的環境の中でも、自然界と同様な食物連鎖や物質循環が、いろいろな生物によって営まれていることを学習した。同時に、畑の命ともいえる土について、その構造と特性を学習した。

以上を学んだ上で、実際の作業に入った。初年度は土作りから行う時間的な余裕がなかったため、園芸業者に依頼して、農作業が行える土を入れてもらった。２年目は、初年度の土に有機肥料と若干の化学肥料を加える作業を教員側で行った。

〔1・2年生ともに〕初年度は鍬や移植ごてを用いて、２年目は耕耘機を用いて、土の中に空気を入れ込むとともに土中の雑菌を殺すため、土起こしを行った。土起こしが終了した後、花や野菜の種まきを行った。なお、初年度は育てやすい植物を指導者側があらかじめ選んでおいたが、２年目は JRC 委員会を中心とした生徒たちの話し合いにより、育てる植物を生徒たちに決定させた。

種まきが終わると、以後しばらくは、水やりや草むしりなど畑の管理を継続的に行った。これも生徒たちの話し合いにより自主的に当番を決め、それぞれに責任を持たせた。夏休みなどは、水やりだけのために登校しなければならず、土からの照り返しで蒸し暑い中、大変な思いをした生徒もいたが、実際に作物が収穫されると、それぞれの生徒が自分の仕事をやりぬくことの大切さと責任を果たした満足感を実感していたようである。

草むしりをして畑を管理

5月

〔1・2年生とも〕この期間は、4月から引き続き、当番制による畑の管理を行った。途中で、その日の当番に育てている植物の生育状況を報告させたり、仕事を行う上での問題があるか、もしあれば、それへの対応策は何か、対応策はどのように行うかを考えさせ、作業としてそれを盛り込み、新たな当番の仕事を決定し実行させる予定であったが、この2年間は比較的天候に恵まれたため、草むしりの回数をどうするかという点以外は、特に問題とすべきことが起こらなかった。

6月

〔1年生〕この時期にコスモスの種まきを行った。

〔2年生〕6月に大根が、6～7月にかけて胡瓜が収穫された。そこで、学年の教員と生徒たちで話し合いをもち、つくった野菜をどこへ寄付するかなどを考えた結果、いつも身近で世話になっている保護者にプレゼントすることとなった。

7月

〔1年生〕生徒による当番制で水やりを行った。

〔2年生〕6月の話し合いに従い、保護者会の折に大根と胡瓜をプレゼントした。

8月

〔1年生〕7月同様、生徒による当番制で水やりを行った。

9月

〔1年生〕コスモスの花が少しずつ開花してきたので、花のスケッチを行うとともに、花を題材にして短歌をつくらせ、植物を愛でる楽しさとともに、そこにも小さな命が宿っており、厳しい自然の中で懸命に生きていることを学習した。

〔2年生〕4月同様、初年度は鍬や移植ごてを用いて、2年目は耕耘機を用いて、土に空気を入れ込むとともに雑菌を殺すための土起こしを行った。この時期は学校行事との関係で、活動時間が不足したため、土起こしは教員が行った。土起こしが終了した後、秋野菜の種まき・種芋植えを行った。

その後は、しばらくは水やりや草むしりなど畑の管理を継続的に行った。

10～11月

〔1・2年生とも〕水やりや草むしりなど畑の管理を行った。

12月

〔2年生〕この時期に、じゃが芋、ブロッコリー、白菜、里芋が収穫された。収穫された野菜は、「収穫祭」として、生徒全員で収穫作業を行った。収穫した作物は全員で持ち帰り、自宅で食べた。その後、われわれの生活＝命は、他の生物の命をいただくことで維持されていること、ひいてはどのような生き物であろうと、命を大切にしなければならないことに気づかせる講座を開いた。

育てた野菜を収穫

1～2月

〔1・2年生とも〕4月からの作業のために土起こしを行った。

3月

〔1・2年生とも〕1年間の活動を通して気づいたこと、感じたことなどを書かせ、発表させることで、生徒どうしでお互いの考え方、感じた方を相互に理解する場とした。また、生徒たちの中で、作物について興味・関心をもった事項について、自主的に研究するための「命の学習文庫」も整えた。

2.「学校・地域を磨く日」について

①活動の種類

奉仕

②取り組み単位

中等1年生及び2年生でこれを行い、取り組みの単位は学年である。

中等1年生は「学校を磨く日」として学校内を、2年生は「地域を磨く日」として通学路とその周辺を掃除した。

③活動の時間的な流れ

11～12月

〔1年生〕生徒に受験生を迎える立場として、自らが受験生であった昨年のことを振り返りながら、学校内のどのような場所を、どのように掃除すれば、受験生が気持ちよく入試に立ち向かえられるかを、班ごと（1班8人程度）に話し合わせた。場所が決まったらその場所を実際に見に行き、必要な掃除用具や掃除を行う際の注意事項など具体的な計画を話し合いによ

り、作成させた。

1月

〔1年生〕作成した計画にそって、実際に清掃を行った。生徒たちは、初めて掃除を行う場所であったためか、掃除をしながら、当初の計画以外にも掃除箇所について気づくことがいろいろとあり、そちらにも手を出したため、時間をオーバーしてしまう班も複数あった。事後学習として、事後の感想を述べ合った後、掃除した場所を日ごろ掃除している方々（用務員）に、感謝とともに、生徒たちが今回掃除をしながら気づいたこと・思ったことを盛り込んだ「サンキュー・カード」を作成し、お礼の言葉とともにプレゼントした。

「学校を磨く日」での清掃の様子

活動のポイント

1.「いのちの学習」について

活用した人材　神奈川県立横浜清陵総合高校JRC担当の坂本宏明先生にご紹介いただき、同校の生活園芸担当鈴木功先生に、栽培実習上の見学および栽培実習授業の具体的な内容や注意すべき点などを説明していただき、今後の授業の参考にした。

活用したもの　活動助成金により購入した耕耘機、草刈機、農業用研究図書

2.「学校・地域を磨く日」について

活用したもの　活動助成金により購入したごみ収集用トング、たわし

活動の成果

1.「いのちの学習」について

①モデル校に指定していただいたことにより、用具の整備が急速に進み、「農作業を教材とした道徳の学習」という認識が教員間に定着し、より具体的に進めることができるようになった。

②活動助成金により耕耘機や草刈機の購入が可能となり、使いたい時に、いつでも、自分たちの手で畑を耕したり、草刈りを行うことができるようになった。そのため、授業の準備を大幅に軽減することが可能となった。

③活動助成金を使い、生徒用および教員用の農業用研究図書を購入したことにより、生徒自身が学習を発展・深化するための環境を作り出すことができた。

2.「学校・地域を磨く日」について

①活動助成金によりごみ収集用トングとたわしを購入することで、ゴミ回収の効率が向上し、以前に比べて時間当たりの収集量が増えた。その結果、生徒たちの達成感・満足感が増し、後輩へ良い影響が波及し今後の活動への意欲をさらに盛り上げるきっかけとなった。

モデル校指定後の変化

「いのちの学習」および「学校・地域を磨く日」ともに

指定前に比べ、用具などがほぼ揃ってきたため、生徒による活動が活発となった。その様子を見ることで、担当者以外の教諭の興味・関心が増し、校内の活性化につながった。

また、「いのちの学習」については、生徒たちがつくった野菜を保護者にプレゼントしたことで、生徒の家庭での話題提供、学校と保護者との関係の強化など思わぬ好循環を生むこととなった。

今後の取り組みの見通し

1.「いのちの学習」について

農作業のノウハウを学校内で蓄積し、より安全で、おいしく、収穫率を向上させた野菜づくりや花づくりを行い、保護者ばかりではなく、地域や日頃訪問している老人ホーム等の施設などへ配布できるようにしていくことで、地域や諸施設との人間関係をより強くしていく。

2.「学校・地域を磨く日」について

現在、自治会長や町内会長などの協力のもとで生徒による地域清掃を行っているが、やがては地域の人たちと一緒に、地域清掃に関わる諸事について話し合いをもつことで、より地域に密着した形で活動を行っていく。

以上の取り組みを通して、生徒たちに、命を大切にする心や「気づき・考え・実践する」姿勢を育てたい。

選考員のコメント

ある方が、こんなことを言っておられます。「心は見えないので、目の前にあるものを磨くことによって心を磨くのだ」と。

二つの大きな活動のうち、「学校・地域を磨く日」という具体的な取り組みを通して、生徒たちが自分自身の心を磨いたことが、もう一つの取り組み「いのちの学習」に繋がったのだと思います。いのちに寄り添うことが何より大切ということが伝わる活動でした。

高等学校の部

地域貢献・国際貢献への模索

多様な活動を通じて

長野県　長野県豊科（とよしな）高等学校

活動の種類	活動の単位	活動期間	教育課程上の主な位置づけ
国際理解・親善他すべて	クラブ	通年	特別活動

活動のねらい

生命と健康を大切にし(健康・安全)、広く世界の状況を学び自分たちの出来ることを率先して行動に移す精神を育み(国際理解・国際奉仕)、社会のため人のため人に尽くす責任を自覚し実行する(奉仕)という目標をもって、自らが「気づき、考え、実行する」自主的自律的態度を養う。

JRC福祉クラブ中心に、地域に根ざした奉仕的活動、長野県レベルでの交流訪問、世界的レベルでのアフガニスタン難民支援や「みどりの大地計画」(ペシャワール会)への援助。さらに、UNHCRとの協力でミャンマー難民キャンプへの支援(ピースパックプロジェクトⅡ)など、赤十字の精神をいかしながら、多面的な活動の中から、人と人とのつながりを意識させつつ、研究発表等を重ねることを通して世界認識の力を育成する。

具体的な活動内容

「健康・安全」

（1）総合的学習で、AEDや心肺蘇生法の講習会を全校に実施。(保健部との連携)

（2）クラスマッチでの救護テントの運営。(保健部との連携)

「奉仕」

（1）障がい児学童の放課後における支援。県安曇養護学校に通っている障がい児者の放課後を一時預かりしているNPO法人「夢の実」の活動を支援するため、自分たちの出来ることとして、時として保護者がわりとなってボランティアを通年実施している。

（2）『咲かせよう友情花』を合い言葉に地域の防犯に協力。安曇野市防犯協会並びに豊科警察署と協力し、防犯活動や、豊科駅前に花壇を設置。安曇野市長・警察署長より防犯功労賞を受賞。

（3）各施設のイベントなどに通年お手伝い。(年々増加していくが、でき得る範囲で今後も続けたい。)

（4）外国人のための日本語教室のお手伝い。(土地柄、外国人労働者が多い。彼らもその子どもたちも日本語がほとんど理解できないため、毎週1・2回お手伝いをしてきているが、子どもたちの減少傾向が目立ち、依頼された時や必要に応じてのお手伝いをしている。

（5）県境栄村との手紙交流や訪問を今まで通り実施

（6）必要に応じて募金活動を実施している。特に“山下夏君”の募金活動に力を入れた。「夏君を救う会」との交流もあった。

郷土料理実習

「国際理解・親善」

（1）アフガニスタン難民支援の為、NPO法人ペシャワール会との交流や支援を昨年に続き実施。今後も継続予定。

（2）ピースパックプロジェクトⅡの実施。UNHCRと協力し、ミャンマー難民キャンプに“平和の小包”を送付。

（3）研究→検討→実施という実践形式の充実。(学習会や研修)

（4）ヨーロッパ社会の現況（特にスウェーデン）学習

①スウェーデンの社会福祉政策について、他。

②スウェーデンと日本の社会福祉の相違について、他。

③スウェーデンと日本の医療全般について。

④ドイツにおける医療、老人ホーム・保育園等の現況、他。

※研究冊子「ヨーロッパ社会の歴史・実態　～日本との比較～」は、長野県豊科高等学校JRC福祉クラブ

保管。

「赤十字の理念の学習」

（1）国際人道法の認識を深め、世界情勢と展望を考察する力を育成。
（2）地元の安曇野赤十字病院との連携強化。
（3）福祉関係への進学希望が多い本校生徒への適切な進路ガイダンス。

「その他」

研究実践の軌跡を記録にまとめる。

活動のポイント

「関係団体・関係機関との連携」

日本赤十字社長野県支部、安曇野市社会福祉課、松本市社会福祉課、長野県豊科警察署、安曇野市防犯協会、その他多数。

「活動の体制」

事前の計画立案・資料集め・役割分担等、全て極力生徒の自主性に任せ、不備な点・準備不足な部分のみ顧問が助言する形で進めた。また、取り組みが単年度で終わらないよう各活動の反省・総括をしっかりとして、クラブ内に蓄積と引継ぎをしていった。

活動の成果

多面的多角的な視点と継続的連携により、青少年赤十字の実践目標と態度目標の醸成を図り、校内・保護者・地域・県内・国際的レベルへと発信し、福祉的奉仕の前途と展望を生徒に考え実践させることができた。

また、進路を射程に入れつつ、社会認識を深め、意識づけながら、適切な選択ができるように指導することが可能になった。

福祉政策の今までと今後を考えながら、高校生としてできることを実践し取り組むやりがいと信念と熱意を引継いでいくことができた。

高齢者体験

モデル校指定後の変化

企画段階から生徒がより主体的に活動できるようになったこと、活動の視野や範囲が広がったことが、指定前と後とで大きく変わった点と言える。

今後の取り組みの見通し

どうしても活動の主体がクラブ活動に限定されてしまいがちなので、学級単位、あるいは全校あげて、というように多様な形態での取り組みができるよう考えていきたい。

選考員のコメント

青少年赤十字の「実践目標」の中に、２年間を通した活動が、体系的に位置づけられたことで、着実な広がりと深まりと高まりに繋がったと思います。

とりわけ、実践目標の「奉仕」に関しては、栄村との交流を通して、地域と密着した取り組みが継続され、「国際理解･親善」においては、海外の難民に目を向け、今、できる具体的取り組みが実践され、高校生の達成感につながったことが素晴らしいと思います。

全国高等学校総合文化祭で発表

気づき、考え、実行するJRC活動の実践
「私たちにできる防災計画」地域と連携した防災への取り組みを中心に

栃木県　県立学悠館（がくゆうかん）高等学校

活動の種類	活動の単位	活動期間	教育課程上の主な位置づけ
健康・安全、奉仕、国際理解・親善、その他	部活動	通年	部活動

活動のねらい

一人の生徒の「気づき」に端を発し、日本赤十字社はじめ関係機関・地域の支援をうけ、本校 JRC 部の「防災講座」を企画・運営し、ワークショップの実現を目指した。また、態度目標に準じた様々な活動、研修や体験学習を行い、生徒の幅広い知識の習得・活動意欲・意識の向上を目指した。

具体的な活動内容

Ⅰ　私たちにできる防災計画

○学悠館高防災講座の企画・運営

地域住民との交流・学習の場としての防災への取り組みである「学悠館高 JRC 部による防災講座」を開催した。

まず防災に取り組むきっかけを作った生徒をはじめ JRC 部の代表生徒と、防災講座で協力をいただく日本赤十字社栃木県支部職員と栃木市役所の皆さんと準備会議を開き、講座の概要を決定した。さらに、地域の方へ参加協力依頼のためケーブルテレビに出演したり、清掃活動や実施踏査の折りにチラシを配布したり、自治会へ依頼したり、ポスターを掲示するなど、地域住民に対しPR活動も積極的に行い、広く参加を求めた。

準備会議を経て、次のような防災講座を企画し、実施した。

6 /27（土）講演

「栃木市の防災」（市役所総務課）

市職員による身近な地域で起こった過去の災害状況、防災に取り組む必要性についての講話。

「避難所　学悠館高校の運営」

（学悠館高 JRC 部）

JRC 部員が本校の避難所としての活用プランを、校舎の施設を案内しながら説明。

7 / 4（土）災害時図上型防災訓練 DIG

（防災アドバイザー）

生活安全防災アドバイザーを講師に迎え、大地震時の災害を想定し、予測される事象を地図上に書き込むイメージトレーニング。

避難所としての学校の使い方を考える

7 /11（土）

災害時生活支援講習（炊き出し訓練も含む）

（日赤栃木県支部）

日赤栃木県支部職員を講師に迎え、災害時における避難所での生活支援について講義と実習。避難した高齢者に対しての移動の補助方法、リラクゼーションのやり方など、日常生活の中でも実際に役立つ知識と技術の習得。

7 /21（火）～7 /23（木）赤十字救急法講習会

日赤栃木県支部職員はじめ、赤十字救急法指導員による赤十字救急法講習を開催。一般県民と共に赤十字救急法の技術・知識の習得。生徒達は人命尊重の意識も向上し、救急員の資格も取得した。

Ⅱ　本校の主な活動、手と手をつなぎ、思いやりの心を育むために

○健康・安全

栃木市協働まつり、赤十字救急法講習会、PTA との AED 講習会
・心肺蘇生法・AED 使用法の講習会、ストッキングを利用した応急手当の方法を学習した。
・赤十字の知識と技術を習得し、万一に備えることを考えた。（先見）
・本校における「学悠館高校防災講座」の企画として、防災に関する知識を学びながら、赤十字救急法を学び、自分たちにできることを考えた。
・習得した知識を、ミニ講習として地域の方に向けて発表した。

異文化理解授業でのトピックアルバム製作

○奉仕

募金活動、県障害者スポーツ大会ボランティア、栃木駅周辺の清掃活動、あいさつ運動（街頭活動・年２回）、赤十字まつりボランティア、献血推進広報活動・献血ボランティア（献血ポスター掲示・放送による呼びかけ、・当日のボランティア・献血俳句の応募）、・地域の方々と交流する中で、コミュニケーション力を養い、地域に貢献できる活動を展開しながら、生徒の発案による主体的・自主的な活動を実践した。
・活動を通し、思いやりの心・奉仕の心を育みながら、校外における青少年赤十字活動について理解してもらうよう努めた。
・赤十字活動の柱の一つでもあり、災害時においても重要となる血液供給について、学校の生徒・教職員に PR し、その重要性を訴え、意識の啓発をはかった。

○国際理解親善

●モンゴルおよびタンザニアへトピックアルバム・文房具支援と親善品贈呈
●トピックアルバムの製作（JRC 部・「異文化理解」授業）
●タンザニア報告会（JRC 部・ムベンバ中等学校との交流推進）
●英語科への教材提供（トピックアルバムの製作・地雷模型の展示・情報の提供）
・モンゴル・タンザニアに送付するために、校内で不要になった文房具の回収を呼びかけ、思いやりの心を育む広報活動を展開した。
・日赤栃木県支部職員・タンザニアに派遣されていた本校在籍教員（海外青年協力隊）を通して、親善品を贈呈し、交流を図る。またトピックアルバムを製作することにより、他国を知り自国についても知る機会を持った。 また同教員から、JRC 部より贈呈した文房具と親善品の贈呈式の様子やタンザニアの風習、生活、学制、学校生活などの報告を聞いた。現在のニーズについて部員で考え、その新たなニーズをもとに、どのような活動ができるか検討した。異文化を理解し、今後の国際理解・親善活動に生かすことを考える機会となった。
・本校の英語科の「異文化理解」授業において、トピックアルバム作成による親善品交換事業の紹介をすることで、青少年赤十字に対する理解を得ることができた。また、英語の教科書に出てくる「地雷」の単元においては、それに関する JRC の機関紙や資料、支部より借り受けた地雷模型を副教材として提供した。日本では考えられない「世界の現実」を視覚的に伝えることができる教材として、高い評価を受けた。

Ⅲ　自己を磨く知識・技術の習得のための研修

・日本赤十字社本社と東京消防庁本所防災館見学

訪問した日赤本社では、赤十字や青少年赤十字に関する講話や赤十字プラザ・援助物資倉庫見学を通して、赤十字への興味関心を高めると共に、見聞を深めた。東京消防庁本所防災館では災害疑似体験により、知識を広げ、防災意識を高めることができた。

・災害時図上型訓練　（DIG）

栃木市役所で行われた職員対象の研修に、特別に参加させていただき、この経験をもとに本校の防災講座への導入を図ることができた。

・実施踏査

地域についての理解を深め地域住民の方々と共通意識をもつこと、またあわせて地域のハザードマップを作るため、災害時に危険が予想される箇所についても、清掃活動をしながら近隣地域を事前に調査した。その結果を、本校防災講座の災害時図上型訓練　（DIG）に活用した。

・災害用伝言ダイヤルの体験

防災講座　DIG 研修

Ⅳ　広報活動～本校の JRC 活動紹介のための発表～

○発表の機会をいただき、JRC メンバー・他校生徒・一般県民などを対象に、パワーポイントによる発表、展示、ストッキングの応急手当やリラクゼーションの講習会等、「赤十字」「JRC」「本校の JRC 活動」などのテーマでの広報を行った。
また、日赤県支部パンフレットをはじめ、地元ＴＶや新聞（読売新聞、朝日新聞）等、メディアによる紹介もしていただいき、平成 20 年度春には、平成 19 年度までの活動に対し、社団法人　日本善行会から日本善行賞の表彰を受けた。

活動のポイント

・赤十字のノウハウを活用し広報するために、日赤栃木県支部の全面的なバックアップをいただき、その協力の下で幅広い知識の習得と活動が実現できた。また、顧問以外の教職員や関連団体（日赤支部、市役所など）から積極的にアドバイスしてもらうことをこころがけた。
・指定を受けたことで、本社・防災館の見学や災害時体験など、研鑽を積む良い研修の機会をいただいた。また、中央から著名な講師を招聘することもできて、充実した研修を防災講座に取り入れることができた。生徒は良い経験をさせていただき、さらに意欲的に取り組む活力になった。
・赤十字救急法や災害時生活支援講習会で学んだ「ストッキングの応急手当」や「リラクゼーション」の技術を他校メンバーへ紹介するという学んだ知識の伝達を自分達の新たな活動として展開することができた。
・トレーニング・センターで作成したワークショップの発表会を行い、部員・顧問から評価・アドバイスを受けて、ワークショップを実行に移すようにした。
・実際の活動場面において、いかに「新たな気づき」が自分たちの中から生まれてくるか、生徒たちが話し合う機会を多くもつことを心がけ、自分たちの意見を集約する形となるようにした。
・防災に関する自助・共助の方策について考察するにあたっては、JRC の「先見すること」の意識をもって「気づき」「考える」ように指導した。
・活動後の振り返りを重点的におこなうことを実践させた。
・発表する機会を求め、発表にも創意工夫を凝らすことを助言し、考えをまとめさせた。

ストッキングを使った応急手当

活動の成果

・財政面でも援助いただけたので、広い範囲に声をかけ、防災講座を実施することができた。自治会をあげて参加してくださるところもあり、地域の方に大勢参加していただけた。さらに本校の JRC 部員以外の生徒や先生方の参加もあり、どの講座も盛況であった。生徒たちにとって、地域の方々とコミュニケーションを取る良い機会となり、本校が避難所として地域に認識されると共に、これからの JRC 活動や赤十字について、理解を得ることも出来た。生徒の小さな気づきから、本校の職員生徒のみならず、日赤栃木県支部や栃木市役所のみなさん、地域の方々をまじえた総合的な本校の防災講座となり、ワークショップの実現につながる活動となった。
・地域の方々とともに赤十字救急法講習会・防災に関する講習会などを行うことで、地域に貢献するとともに、本校生徒・職員の防災に対する危機管理意識が高まった。
・救急法に触れ、日常においても、万一の場合にも適切な行動がとれるよう努力する意識が向上した。
・学校祭でアンケートを実施し、地域の防災意識が希薄であるという実態がわかっていたので、地域のニーズに基づき防災講座を実施した。
・本校が「避難場所」として認識されるようになり、地域の防災意識の啓発の一助となった。
・献血の重要性に改めて考え、気づく機会となり、ボランティアとして協力し、協力者の増加に貢献できた喜びを実感した。
・トピックアルバムの製作により、自分を取り巻く環境について見直すチャンスとなり、顧みることが出来た。また、他国の情報を知ることにより、自分の国や文化についても改めて知ることができた。
・異国の文化や生活に関する情報を直接入手できる喜びが、興味関心を向上させると共に、生徒の授業に取り組む意欲へとつながった。
・本社の研修で、赤十字に対する関心が高まった。特にトレーニング・センターに参加できなかった生徒には、絶好の学びの機会となった。
・一人ひとりが人前で表現するという経験をすること

で、生徒達は大きな達成感味わい、自分に自信を持つことができた。
・一人の部員の気づきを部員全員で意見を出し話し合い、それぞれの視点で考え、関係機関の協力のもと、実現することができた。

モデル校指定後の変化

●JRC 活動を行うことにより、自己決定の場が与えられる機会が増える。その中で、
・自分の新しい一面の発見と新たな可能性の開発
・自己存在感を感じることができる
・共感的な人間関係を結ぶ力が育成される
・自分に自信がもてる
・積極性・考察力・探究心・創造力が養われる
というような変化（自己成長）があげられる。
●赤十字ならではの利点として、国際的な広い視野に立ち、見聞を深めることができる。そのため、日常ではあまり考えない戦争や紛争、大規模な自然災害など、広く世界に目を向けるようになり、活動の幅が広がった。

今後の取り組みの見通し

地域の方に本校を理解していただくよい機会となり、地域にあって本校の防災の面から果たす役割も明確になった。また、地域の方の「このような機会が必要である」との要望も踏まえ、今後の活動は、地域のハザードマップを作成、防災講座の継続に向けた取り組み、校内はもとより地域へのさらなる啓発活動を展開する予定である。
・防災活動のみならず、すべての活動において、常に「気づき」「考え」「実行する」という意識のもとに活動を継続させる。
・「気づき　考え　実行する」ことを体験し、生徒の士気も高まっているので、生徒自身が見つけた課題解決のため、「考える力」「主体的に行動する力」「よりよく問題を解決する力」を育むワークショップを実践できるような指導・助言に努める。
・他校 JRC 部の活動の参考となるよう新たな活動分野の展開例として本校の取り組みを提示する。さらに日赤・市・地域をはじめ校内外の連携・協力体制の構築に向けても広く活動を紹介していく。
・タンザニアとの交流についても、本校 JRC 部においてできる活動を考え､今後も継続して推進していく。

選考員のコメント

「防災」に的を絞ったところが特筆すべき内容でした。行政、地域にでかけての取り組みは、学校のみならず、広く地域の防災意識の喚起に繋がったことが大きな成果でした。
今ひとつ注目すべきは、英語という教科の中に、JRC を導入したことがあげられます。
新しい気づきによって斬新な発想が生まれ、そのことが主体的かつ積極的な実践へと発展し、高校生の日常の活動に浸透したことが大きな成果だと感じました。

著名人の言葉

Phrases on the Red Cross Movement by the World celebrities

赤十字は信念と行動の合体である。そこに青少年が加わるとき、青少年独特の誠実、純真、率直を持ち込むことになる。この特質は機を得て偉大なる力を発揮するものであるが、青少年赤十字こそは、この機会を青少年に与えるものである。

レネー・サンド（元赤十字社連盟技術顧問）

日本赤十字社本社・各都道府県支部所在地一覧

本社・支部名	所在地		電話番号
本社	105-8521	東京都港区芝大門 1-1-3	03-3438-1311
北海道支部	060-0001	北海道札幌市中央区北 1 条西 5	011-231-7126
青森県支部	030-0861	青森県青森市長島 1-3-1	017-722-2011
岩手県支部	020-0021	岩手県盛岡市中央通 1-4-7	019-623-7218
宮城県支部	981-0914	宮城県仙台市青葉区堤通雨宮町 4-17	022-271-2251
秋田県支部	010-0922	秋田県秋田市旭北栄町 1-5	018-864-2731
山形県支部	990-0023	山形県山形市松波 1-18-10	023-641-1353
福島県支部	960-1197	福島県福島市永井川字北原田 17	024-545-7997
茨城県支部	310-0914	茨城県水戸市小吹町 2551	029-241-4516
栃木県支部	320-8508	栃木県宇都宮市若草 1-10-6　とちぎ福祉プラザ内	028-622-4326
群馬県支部	371-0833	群馬県前橋市光が丘町 32-10	027-254-3636
埼玉県支部	330-0062	埼玉県さいたま市浦和区仲町 3-2-23	048-829-2681
千葉県支部	260-8509	千葉県千葉市中央区千葉港 5-7	043-241-7531
東京都支部	169-8540	東京都新宿区大久保 1-2-15	03-5273-6741
神奈川県支部	231-8536	神奈川県横浜市中区山下町 70-7	045-628-6306
新潟県支部	951-8127	新潟県新潟市中央区関屋下川原町 1-3-12	025-231-3121
富山県支部	930-0859	富山県富山市牛島本町 2-1-38	076-441-4885
石川県支部	920-8201	石川県金沢市鞍月東２－48	076-239-3880
福井県支部	918-8011	福井県福井市月見 2-4-1	0776-36-3640
山梨県支部	400-0062	山梨県甲府市池田 1-6-1	055-251-6711
長野県支部	380-0836	長野県長野市南県町 1074	026-226-2073
岐阜県支部	500-8601	岐阜県岐阜市茜部中島 2-9	058-272-3561
静岡県支部	420-0853	静岡県静岡市葵区追手町 44-17	054-252-8131
愛知県支部	461-8561	愛知県名古屋市東区白壁 1-50	052-971-1591
三重県支部	514-0004	三重県津市栄町 1-891	059-227-4145
滋賀県支部	520-0044	滋賀県大津市京町 4-3-38	077-522-6758
京都府支部	605-0941	京都府京都市東山区三十三間堂廻り町 644	075-541-9326
大阪府支部	540-0008	大阪府大阪市中央区大手前 2-1-7	06-6943-0705
兵庫県支部	651-0073	兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通 1-4-5	078-241-9889
奈良県支部	630-8133	奈良県奈良市大安寺 1-23-2	0742-61-5666
和歌山県支部	640-8137	和歌山県和歌山市吹上 2-1-22	073-422-7141
鳥取県支部	680-0011	鳥取県鳥取市東町 1-271	0857-22-4466
島根県支部	690-0824	島根県松江市菅田町 168-36	0852-21-4237
岡山県支部	700-0823	岡山県岡山市北区丸の内 2-7-20	086-225-3621
広島県支部	730-0052	広島県広島市中区千田町 2-5-64	082-241-8811
山口県支部	753-0094	山口県山口市野田 172-5	083-922-0102
徳島県支部	770-0044	徳島県徳島市庄町 3-12-1	088-631-6000
香川県支部	760-0017	香川県高松市番町 1-10-35　香川県社会福祉総合センター内	087-861-4618
愛媛県支部	790-8570	愛媛県松山市一番町 4-4-2（県庁内）	089-921-8603
高知県支部	780-0850	高知県高知市丸ノ内 1-7-45　総合あんしんセンター１階	088-872-6295
福岡県支部	815-8503	福岡県福岡市南区大楠 3-1-1	092-523-1171
佐賀県支部	840-0843	佐賀県佐賀市川原町 2-45	0952-25-3108
長崎県支部	850-8575	長崎県長崎市魚の町 3-28	095-821-0680
熊本県支部	861-8039	熊本県熊本市長嶺南 2-1-1	096-384-2100
大分県支部	870-0033	大分県大分市千代町 2-3-31	097-534-2236
宮崎県支部	880-0802	宮崎県宮崎市別府町 3-1	0985-22-4045
鹿児島県支部	890-0064	鹿児島県鹿児島市鴨池新町 1-5	099-252-0600
沖縄県支部	902-0076	沖縄県那覇市与儀 1-3-1　複合管理棟５階	098-835-1177

青少年赤十字モデル校選考会選考員

平成 17 年度

(1) 学校教育関係者（青少年赤十字全国指導者協議会役員）

藤井　厚介　（会　長：愛媛県今治市立立花小学校校長）
近藤 信一郎　（副会長：福井県福井市大東中学校校長）
福永　恒泰　（副会長：兵庫県立神戸高等学校校長）

(2) 日本赤十字社支部職員

山本　佑幸　（神奈川県支部事務局次長）

(3) 日本赤十字社本社職員

五十嵐　清　（総務局組織推進部長）

平成 18 年度

(1) 学校教育関係者（青少年赤十字全国指導者協議会役員）

佐倉　國蔵　（会　長：京都府京都市立祥栄小学校校長）
小俣　好三　（副会長：山梨県大月市立大月第一中学校校長）
広原　啓視　（副会長：島根県立大社高等学校校長）

(2) 日本赤十字社支部職員

畑　喜春　（兵庫県支部事務局長）

(3) 日本赤十字社本社職員

勝村　秀樹　（総務局組織推進部長）

平成 19 年度

(1) 学校教育関係者（青少年赤十字全国指導者協議会役員）

岡部　文尋　（会　長：奈良県奈良市立富雄第三小学校校長）
小俣　好三　（副会長：山梨県大月市立猿橋中学校校長）
広原　啓視　（副会長：島根県立大社高等学校校長）

(2) 日本赤十字社支部職員

東田　雅俊　（兵庫県支部事務局長）

(3) 日本赤十字社本社職員

勝村　秀樹　（総務局組織推進部長）

平成 20 年度

(1) 学校教育関係者（青少年赤十字全国指導者協議会役員）

西　正夫　（会　長：長野県信濃町立柏原小学校校長）
小俣　好三　（副会長：山梨県大月市立猿橋中学校校長）
荒川　恭嗣　（副会長：秋田県立秋田北高等学校校長）

(2) 日本赤十字社支部職員

東田　雅俊　（兵庫県支部事務局長）

(3) 日本赤十字社本社職員

勝村　秀樹　（総務局組織推進部長）

平成 21 年度

(1) 学校教育関係者（青少年赤十字全国指導者協議会役員）

西　正夫　（会　長：長野県信濃町立柏原小学校校長）
濵村　龍彦　（副会長：広島県広島市立国泰寺中学校校長）
飯野　眞幸　（副会長：群馬県立高崎女子高等学校校長）

(2) 日本赤十字社支部職員

東田　雅俊　（兵庫県支部事務局長）

(3) 日本赤十字社本社職員

三井　俊介　（総務局組織推進部長）

平成 22 年度

(1) 学校教育関係者（青少年赤十字全国指導者協議会役員）

奥田　誠　（会　長：千葉県香取市立府馬小学校校長）
濵村　龍彦　（副会長：広島県広島市立国泰寺中学校校長）
中村　清志　（副会長：島根県立松江東高等学校校長）

(2) 日本赤十字社本社職員

三井　俊介　（総務局組織推進部長）

青少年赤十字モデル校報告書集（平成 22 年度版）
平成 23 年 3 月 31 日初版発行
発行元　日本赤十字社 総務局 組織推進部 青少年・ボランティア課
住　所　〒 105-8521　東京都港区芝大門 1-1-3
電話　03-3438-1311（代表）　HP http://www.jrc.or.jp

国際赤十字・赤新月運動の基本原則

人　道　(Humanity)

公　平　(Impartiality)

中　立　(Neutrality)

独　立　(Independence)

奉　仕　(Voluntary Service)

単　一　(Unity)

世界性　(Universality)

1965年(昭和40年)にウィーンで開催された第20回赤十字国際会議で、「赤十字基本原則」が決議され、宣言されました。

赤十字基本原則は、赤十字の長い活動のなかから生まれ、形づくられたもので、「人間の生命は尊重されなければならないし、苦しんでいる者は、敵味方の別なく救わなければならない。」という「人道」こそが赤十字活動の基本で、他の原則は「人道」の原則を実現するために必要となるものといえます。

青少年赤十字